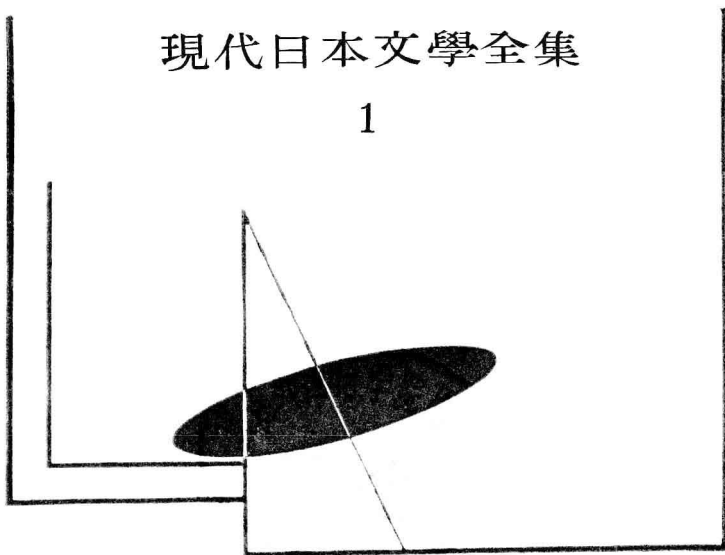




坪内逍遙 二葉亭四迷 集

現代日本文學全集

1



筑摩書房版

現代日本文學全集 1

坪内逍遙
二葉亭四迷集

昭和三十一年八月二十日 印刷
昭和三十一年八月二十五日 發行

著者

坪内逍遙
二葉亭四迷

發行者

古田晁

印刷者

山田一雄

發行所

筑摩書房

（電話）東京二九局（七六五）代表
振替 東京 一六五七六八

印刷 株式會社 精興社
製本 株式會社 精興社
製本 中央製本印刷株式會社

坪内逍遙集 目次

桐一葉（讀本體）……………五

細君……………六

小説神髓……………七

史劇に就きての疑ひ……………一三

藝術上に於ける寫實の位置……………一六

沙翁劇の新演出……………一四

二葉亭四迷集 目次

浮雲……………一五

其面影……………二二

平凡……………二五

あひゞき……………三四

めぐりあひ……………三九

狂人日記……………三六七

小説總論……………三七八

未亡人と人道問題……………三六〇

私は懷疑派だ……………三六一

予が半生の懺悔……………三六四

露都雜記……………三六八

坪内逍遙（正宗白鳥）……………三九三

二葉亭四迷の生涯と藝術（中村光夫）……………四〇三

解説……………四一八

年譜……………四二七

裝幀 恩地孝四郎

坪内逍遙集

桐一葉

(讀本體)

はしがき

此の作、そのはじめ友人鶴田沙石子さかしに粗筋を語り、今より三年ほど前かたに、起稿したまへとすゝめしに基きて、同子が綴りかけて中絶せしもの六場ほどありしを、去年の秋うけとりて、若し能ふべくば、ありかたのままを補綴して『早稲田文學』に掲げばやと思へりしが、さて人の考へは心々にて、他人の綴りかけたるは、おのが案とは折あはぬ節いと多くて、その儘には筆を加へんすべもなく、まづ試みに序幕三場を走りがきに綴り添へて、それを『文學』の紙上に掲げ、やがて興の來るに任せて、淀君夢の場をもかきそへにき。さて後々の趣向などは、只おぼるげに立てたるのみにて、おぼつかなくも綴りもてゆくほどに、やう／＼筋立むづかしうなりて、沙石子の原稿は、悉く餘所になり、『桐一葉』といふ題號の外は、筋立も人物も、全く別仕立となり了ぬ。随うてはじめ走りかきにせし序幕三場と、後の趣向とは、折あはぬ節もいでき、五六幕目を綴るころに至りては、我

れながら前後不揃の感深く、幾たびも筆を投ぜんとせしこともありけり。辛うじて綴り果てゝ見れば、拙さいよ／＼著く、一たびは燒きも棄てばやと思ひたりしが、しかすがに未練氣生じて、此のまゝに打すてんもくちをし、ふと思ひたちて春陽堂のあるじが許へ、わがしかん／＼の作を出版せんの意なきか、若し出版の意あらば、餘りに矛盾したる節は、能はん限り修正して稿本を送らんといひやりぬ。儲け心の外に男氣ある春陽堂のあるじ、病中ながら快くうけがひて、すぐにも出版せんといふ。折から依田學海翁の綿密なる批評『讀賣』の紙上にいでて、我が作の拙きを正し、作者が心づかざりし缺點をも指摘する所尠からず。これにます／＼便を得て、辭も意も處々に修正を加へて、つひに現形の如くになしつ。されど生中に、こゝかしこ無理なる筆を加へたれば、大かたははぎ／＼布子のやうになりて、或はもとの形よりさへ醜くなりし所多かるべし。就中文句の如きは、あとより入れし斧の痕、まぎ／＼と見らるゝ、我が見てだにかたはら痛けれど、今更に如何ともすべなし。あはれ、かく拙しとは心づきなながら、初めて生みし子と思へば、不具ながらいとをしくて、嗚呼がましくもおぼしたてゝ、かくは世の人にひけらかすになん。

明治廿八年十一月初旬

修正の筆を擱する時

春のや主人

第一段

(其一) 浪花城奥殿
(其二) 同奥庭茶室

第二段

(其一) 吉野山櫻狩
(其二) 奥殿二女密訴

第三段

(其一) 城内溜の間
(其二) 黒書院再評議
(其三) 片桐邸

第四段

(其一) 豊國神社鳥居前
(其二) 同寶前

第五段

(其一) 渡邊内蔵邸
(其二) 饗庭局部屋
(其三) 奥殿乳母自害
(其四) 淀殿寢所

第六段

片桐邸奥書院

第七段

長柄堤訣別

登場人名

豊臣右大臣秀頼
織田入道常眞
大野入道道軒
片桐市ノ正且元

石川伊豆守貞政
木村長門守重成
大野修理亮治長
渡邊内藏ノ介紇
片桐主膳ノ正
渡邊銀之丞
今村三右衛門
十河十兵衛
本村清藏
神崎治右衛門
白倉權六
野呂利珍
豐太閣實ハ石田三成
増田右衛門尉長盛
小西攝津守行長
假面の奴實ハ佐々成政
關白秀次亡靈
淀榮君
正藏尼
大藏卿局
饗庭局
一葉ノ前
小車
梶ノ葉
蜻蛉
錦鳥
花野同

且元弟
内藏介弟
片桐郎黨
同
同
同
大野家來
同
茶道

片桐奥方
奥女中
同
且元女 腰元
腰元
同

第一段

(其一) 浪花城奥殿

奥かたづけの腰元ども、掃除しまうて寄りこぞり

「オ、しんど、オ、しんど、お目ざめにはまだ間がある、皆さん暫時休むまいか 二」そのオ、しんどで思ひだした、此の頃の遅いお目ざめ、日が一、二日のやうに、ちんとしておいでなされたも、おからだが疲れるものかいな 三「サイナ、けふびは大野さまの、御忠勤とやらのせいでもなし 四「アコレ、粗忽な、きこゆるぞえ、皆さんも知つての通り、大佛さまのお鐘のことから、徳川さまの御難題 五「片桐市ノ正さまは、其の申し譚をなされうため、先達て關東へお下り、大藏のお局さまや、正榮尼さまも、後からお越しなされたれど 四「まだ御吉左右が知れぬによつて、御前さまはいかい

初つひ 草くさ 同
おお 虎とら 同
丸まる 殿とん 乳母
松まつ 殿とん 同
其の他、侍士、侍女、中間、亡靈、小姓若干名

御苦勞 五「夜もおちく御寝ならず、時たまおしづまり遊ばすと 四「ナア花野どの、ゆふべも恰ど子の刻過ぎ 四、五「オ、氣味わるト顔色かへ、語れば一同目を圓くし 二「そんならやツぱり噂の通り 一「關白さまの怨靈や 三「御臺さまの幽霊が 一「アノほんたうに 一、二、三「出るのかいな 四「サア、見ぬことゆゑ知れぬけれど、それは／＼氣味のわるいおうなり聲 一「エ、そんならもしやお長廊下へ 二「出るといふのも 一、二、三「ほんまかいな 五「サイナ、まだそればかりぢやないぞえ、二日ほど前の晩、あのお天守にけがな狼煙 四「お星がおすべり遊ばしたの五「等星が見えたのと 四「けたいなことの續くのは、何か變事のある知らせと、圓觀上人さまのお話 一「エ、マ氣味のわるい、變事とは何である 二「大風であらうか 三「大火事であらうか 四「もしや大地震 皆「エ、いふ間にふしじや小籠、襖、ゆら／＼ぐわらぐわら、そりや地簾と、あわてふためき一同が、腰打ぬかす許りなり、うしろにぬツと飄輕もの 椋鳥「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、一「エ、地震かと思うたら 二「またしても椋鳥どの 二「そんなら今のは 椋「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、〇あんまり怖がつてゐやしやんすゆゑ、まさかの時の用心に、一寸試して、見たのぢやわいな、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、四「エ、憎らしい椋鳥どの 五「きツと覺えて 皆々「ひやしやんせいな 一「よいわいな、此の仕返し

には、ナア初輩どの、ナソレ此間このあひだのあの事を
 二「ほんにそれがようござんす 椛「アコレコ
 レ、此間のあの事とは 一「ハアテ、そつちに
 おぼえがある、渡邊様のおとうとご 二「銀之
 丞さまと御長廊下の薄くらがり 椛「アコレコ
 エ、根もないとはいはせぬぞえ、あの折立聴いた
 一部始終 二「今こゝでいはいかないな 椛「コ
 レコレ、それいわれてならうかないな 一「そん
 ならこゝへ兩手をつけて、今のわびをしやしや
 んすか 椛「ぢやというて 一「いはいるか
 椛「サアそれは 三「エ、もどかしい、いつそ
 のくされ、こそぐつてわびさすまいか 四「ほ
 んにそれがよう 皆「ござんすわいなア
 こりやたまらぬと逃げだすを、笑ひさゞめ
 き追うてゆく、入りちがへて右左り、茶道
 野呂利珍柏、奥女中小車、椛の葉
 小「珍柏どのか 珍「小車さま、椛の葉さま、ま
 づまづ首尾ようお三方を 小「アコレ 珍「氣
 どられぬやう内々にて、御案内いたしました
 椛「シテ大野入道さまは 珍「程なく御参入で
 ござりませう 小「それは重疊、幸ひけぶつさ
 い饗庭きやうていどの、御代参のお役目とて、朝まだき
 より外出の用意、まづ／＼首尾ようまゐりまし
 た 椛「それはさうと小車さま、このごりの上
 様の御機嫌、さゝいのことにもお腹だち、疑ひ
 ぶかにお氣質とて、又一しほのおひがみ、困つ
 たことをござりますな 小「サ、それといふ
 もそのもとは、大佛さまのお鐘の銘、腹黒な徳

川さまの御難題、かて、加へてけふの一條、ほ
 んに頼まれぬは人の心、ちツとも油断が成りま
 せぬ、それに付けてもお茶室の御密談、たが立
 聴くまいものでもない、珍柏どは萬事に氣を
 つけ 珍「心得ましてござりまする
 密談なかばへうしろより、ぼんやりぬツと
 若衆まげ、渡邊内藏ノ介が弟銀之丞、だし
 ぬけにさしよつて
 銀「ヤア珍柏こゝにおぢやつたか 皆「エ、
 珍「オ、さういふお前は内藏介さまのおとうと
 椛「オ、銀之丞どのか 小「ほんにびツく
 り 二人「しましたわいの 銀「何のびツくり
 することがある、わしやワツとも何ともいはな
 んだぞやコレ珍柏、おぬしに頼んでおいたこ
 とを、けふまでも返事せぬは、わしを阿呆にす
 るのぢやな 珍「ハ、ハ、ハ、阿呆にするがよく
 出来た、なんの阿呆にしませうぞいな 銀「イ
 ヤイヤ阿呆にするに相違ない、第一笑ふとは何
 ぢやい、人が腹を立つてゐるに、笑ふとは何ぢ
 やい 小「アコレ、候たしやんせ、何ぞと
 いふと刀の燭、お前はマア氣が短い、ほんに何
 やらほど怖おそいものはないわいな 椛「ほんにマ
 ア、どういふ頼みか知らぬけれど、棄てが置
 いたはお茶道がふつ／＼か、早う詫言をしたが勝
 ちぢやわいな 珍「いかさま、かつたい棒打
 とやら、これは愚老が誤りました、が其の頼み
 の一條、コレ銀之丞どの、こゝでぶちまけても
 大事ないかや 銀「ウ、大事ない、此の間
 おぬしがいうた、首尾とやらは出来たかいの

珍「ハレヤレ、さう無遠慮ではとツともう痛み
 入る、ナモウシ小車さま、なぜ人間は、皆こん
 な風に生まれては來なんだか、このはうが手ツ
 とりばやくて、ずんたましてござりますわいな
 ハ、ハ、ハ、小「ホ、ハ、ハ、シタガ銀之丞
 どのや、一體頼みとはどんな事ぢやぞいな
 銀「サイノ、聞いて下され、此のやうなこと
 うたら、又お前がたは笑ふであらうが、わしや
 ちツともをかしくないぞや 小「何の笑はうぞ
 いな、ナア椛の葉さま 椛「サイナ此の通り
 二人「眞面目ぢやわいの 銀「そんならきいて
 下されや、わしはノ、片桐市の正どの、娘の、
 アノかげろふをナ、どういふ譯でやら、始終顔
 が見てゐたいによつて、どうぞ妹にしてほしい
 というたら、母者が、それなら女房に貰うて
 やる、といはしやつたゆゑ、女房にしたら尙ほの
 事、始終顔が見られうかと思つて 椛、小「ホ
 ホ、ハ、銀「それ、笑はしやる、モウいは
 ぬいはぬ 椛、小「ア、誤まつた、堪忍堪
 忍、モウ決して笑はぬわいの 銀「それからわ
 しは、そんなら貰うてというたところ、親御
 の市ノ正殿が、どうしても得心しやらぬとやら
 で、ツイそのまゝ止めになつてしまつて、それ
 からは以前とちがひ、御殿で毎日のやうに蜻蛉
 にあうても、なぜかツンケンと、つれないそぶ
 りばかりしやるによつて、わしや悲しうて心細
 うて、此の間もたツたひとり、お長廊下で泣い
 てゐたら、そこゝるる珍柏が、いろ／＼やさし
 ういうて、近いうち首尾といふこととしてやる

程に、其の代り 珍「ア、コレ、そのあとはいふには及ばぬ、あんまり氣の毒と思つたゆゑ、首尾するとはいふたもの、ナ申し、お二人さま、何やらによつて、其の藥の代とやらに、銀「ぢやによつて、其の藥の代とやらに、あれほど小判といふものを 珍「ア、コレ、ぢやによつて其の藥をオ、噂をすれば影とやら、アレ、お廊下へ蜻蛉どのが 銀「エ、どこに 珍「ソレ、あそこに 小「成る程、これは難病ぢやわいの、お茶道がもてあましたも尤も、ノウ銀之丞どのや、お前の頼みは、人傳では叶ひにくい、今にもこゝへ蜻蛉が見えたら、自身でさういうたがよいわいの 梶「ホ、ホ、ほんにそれが早手廻はし、なぜ直づけにはぬのぢやぞいの 銀「デモ何ぞいはうとすると、ツイつうと立つて去にやるものを 珍「それはお前が下手なゆゑぢや、そうとうしろから忍んでゆき、まづ羽がひじめというてな、かういふ鹽梅に抱きしめて、それから根氣よくくどかうなら、逃がす氣づかひはないわいの 銀「そんならわしがそういうたら、以前のやうに蜻蛉が、やさしうしてたもろかいの 珍「オイノ、今いふやうに、抱きしめておいて、それから、根氣よくどけば、鬼でも蛇でも、なびく、ウ、きつと、なびく、梶「アコレコレ、よい加減にしたがよい、眞實にしかねぬぞや 銀「ヤ、ほんまぢや、アレ、あそこへ蜻蛉が、アレ、へ來やらうわいの 珍「ホイヤレ、嘘からでた實ぢや、こいつはうツかり

こゝにゐて、かゝりあひになつてはたまらぬ 小「ほんに御用を忘れてゐた 梶「ドレ、奥へまゐりましよ 銀「ア、コレ、珍柏、まつたも、コレ、まつたも、逃ぐるが如く三人は、奥の方へぞ入りにける 銀「ホイ、みんな往んでしもた、どうせうぞいどうせうぞい、かうしておれが立つてゐたら、又ツイと去にやるのである、こりやかうしてはをられぬわいの ひとりうろたへ御簾かげへ、かくるゝ間もなかなかたより、市ノ正がむすめかげるふ 振袖姿急ぎ足 梶「日頃意地わるの大野さまと、渡邊、石川のお二方が、折も折とお茶室にて、人目を忍ぶ御密談は、どうでも只事ではないわいの、かういふ時の後ろ楯に、頼まう筈のお方はあつても、正榮尼さまと大藏さまは、ゆんべ遅うお歸りぢやげなに、父上さまは何してぞ、ひよんな噂を聞くにつけ、氣がわく／＼してならぬわいの、せめて饗庭のお局さまに、わけをはなして、さうぢやさうぢや かけゆくうしろに銀之丞、無言でしツかと かつむる袖 蜻「ヤお前は銀さま、コリヤ何となされままする 銀「何ともせぬ、たんといひたいことがある、かげろふどの、どうぞそこゐて下されいのう 蜻「エ、マそこ離して下さりませ 銀「サ離せ

なら離さうほどに、つい立つてゆくまいぞや 蜻「サア用があらばきくほどに、マ離れてゐて下さりませ、サ何の用でござりまするか 銀「サその用はな、蜻「その用はえ 銀「コレ、そのもとと始終一所にゐたい 蜻「エ、モすかね、其のやうなこと知りませぬわいの 銀「マ、マ、まつて、そのやうにもぎどくに、やると、わしや悲しうてならぬわいの、コレ拜む、きいたもいの、蜻「エ、マイやらしい、知らぬわいなア 銀「うんといやらねば、やらぬやらぬ 蜻「エ、用がある、そこ退いて 銀「イ、ヤ退かぬ、退かぬわいの ゆかんやらじと争ふうち、此の體遠目に 梶「かげろふどの、召しますぞえ、かげろふどのかげろふどの よい逃げしほと突きはなし、逃ぐるをおはへる 銀之丞出あひがしらに飛びくる 梶鳥 梶「銀之丞さま 銀「ヤ梶鳥か 梶「銀之丞さま、お前はなア、ようマア此の間は知らぬ、知らぬとおひやつて、ほんに、今やだましましたおぼえはない 梶「ないことがあるかいな、エ、モくやしい、くやしいわいのう 我れを忘れて胸づくし、こなたは短氣のむかばらち 銀「エ、何しをる、慮外もの、切つてしまふぞ かりりぬいたる刀の光、始終うかゞふ野呂利珍柏、あわて驚きはしりいで

珍「ソレお出座ぢやく、お目につくと曲事曲事、ちやつト逃けた、早うかくれた、逃けた逃げた

トおどかせば、二人はあわて右左り、ぼつたておつたて、あと見送り

珍「ハレヤレ阿呆には困り切る、シタガ阿呆でもうつけでも、あの道ばかりは一人前、ハテ争はれぬもの、といへば、争はれぬは金の威光、此の野呂利珍柏老、きのふまでは饗庭のお局のふところ小刀、けふから案を立て直し、御褒美が大野さまのお身方、これを思へば片桐さまが關東方へ付け句、ハテさうでもありさうな、饗庭のお局は、片桐さまと親句のなか、うツかり脇へ付いてゐたら、ツイ同類と思はれて、果は首切、禁句々々、そこを察して愚老が頃留、ハテ我が身ながら名案だわえ

推敵なれば饗庭の局、打かけ姿しとやかに
饗「お茶道 珍「エ、ヤあなたは饗庭のお局さま○まだお、おでかけではござりませぬか
饗「ハテ仰山な驚きやう○御代参の件まはり、支度よければ今よりすまじ。珍「ハイ〜、申し附けるでござりませう。

行くうしろかげつくと〜と

饗「今がチラとき、し噂といひ 珍「エ 饗「ハテ、申し附けて下さりませい 珍「ハイ

(其二) 奥庭茶室

華美を盡せし茶室の結構、植込しげる築山

のだら〜をり、かなたにのつべり根ぶかは石、大野修理亮治長、こなた角たつ苔むり岩、ぎつくしやつと石川伊豆守貞政、おりかけし茶室の前、足かみしにも一刀ざし、渡邊内藏介たちふさがり

渡「アイヤ伊豆守どの、お家にかゝはる一大事の密談に、自儘の中座緩急でござらう 石「ヤア緩急とはきごと、君命なら知らぬこと、身不肖なれど石川伊豆、御分らのおとがひで、指圖うける謂はれはない 修「マ、しばらく、只今我々が申せし條々、御違存とあらばそれまで、只あの片桐市ノ正、ふた心の證據は明白、このまゝに致しおかば、お家の滅亡は目のあたり、さりとて表沙汰にいたすときは、織田入道をはじめ、關東に心を寄する二股武士、御城内に勘からねば、毛を吹き疵を求むるおそれ 渡「そこを存じて此の内藏介、修理どのもろとも晝夜の苦心 石「ヤアさほどまでの忠臣が、なぜま

づ我が君へは言上せず、ほしいまゝの成敗沙汰修「サ、それ繰返し内藏どのいはいはれし所、御母は女儀の疑ひ深く、彼れ此れと御鞆、我が君は御母公次第、兎角に問どる其の間に、計りごと洩るゝときは、城内忽ち騒動なし、織

田、速水、木村など、日ごろふた心を抱くやから、或は關東へ急使をはしらせ 石「黙りめされ 渡「或はこれを好いしほに、我々共を讒言なさは 修「げに内藏どのいはいはるゝ通り、君の御柔弱を幸ひに 石「ヤア黙らつせい、我が君を御柔弱とはどのおとがひ、まツた忠臣の

木村、速水を、ふた心とは何を證據、忠臣は御分らばかりか 渡「これはまた通らぬ豆州、ハテ禮儀は禮儀、實は實、肩毛に火のつくと相談に、腐れ儒者の句穿鑿、エ、馬鹿臭い 石「ヤア實とは何か實、二言といへ、手は見せぬぞ

渡「過言なり伊豆守、ともすれば刀の鯉口、武士の手に珍らしいか 石「何がなんと 修「まゝ、もつとも、いかにこれは我々共が申し誤り、我が君を御にうじやくと申せしは、全く以て申しあやまり、まツた速水、木村の兩士を、サ、いかにも貴所のいはるゝ通り、忠臣にまぎれなし、ふた心などと申せしは 渡「ヤア不覺なり修理亮どの、所詮不得心の 修「サ、不得心などと存ぜしも、まつたく邪推、ナソレ邪推、大野修理亮、まツこの通りおわびい、ま、平に〜

二人を引きわけなだむれば、尻目に石川面ふくらし、ゆかんとしたる後ろの方、聲から先きに木かげより

道「アイヤ豆州、しばらく〜

伊豆守立ちとゞまり 石「フム何人かと存じたら、貴殿は大野の御老體、何ぞ御用ばしござるかな 道「されば極内の御用談、お手間はとらせぬ、マ、これ〜

○イヤナニ倅、先刻よりお召の御模様、そちはお表へ、また内藏どのには、ナソレあたりへ、目ませを心得入るあとの、茶室へ案内し、

四下を見まはし

道「お呼止め申せし慮外、御ようしや下され、只今圖らずも参りかへり、植込ごしに承れば、倅は勿論、内藏介が無分別、御立腹は尤も、しかし彼等とて、畢竟お家を思ふの餘り、何事も君のおん爲と御勘辨、遺恨ござらぬやう、伊豆どの、取分けてお頼み申す、石「改まつたる御挨拶、伊豆ほと／＼赤面いたす、それがしとても一時のいひがかりに短慮の口論、只今と相成り、道「ア、イヤ何の／＼、日頃正直のそこもとゆゑ、金鐵にひとしき速水、木村を、なまくらかと疑ふ廻り氣を、氣にさへられしは尤も至極、もれ聽きし此の入道も、おぼえず歎息仕つた、かく御城内の人心、互ひに疑惑をいだき、目に見えぬ犬を放ち、心の關説くるかと存ずれば、太閤殿下の御餘光も、薄う相成つたと存ぜられ、六十二歳の老眼に、不覺の涙を、た／＼申した、石「御述懐お察し申す、早速ながら承りたいは、市ノ正が一條、修理亮どのに承れば、彼れ本多佐渡と心を合はせ、まづ御母公を人質として關東へ下しまるらせ、おひ／＼當城を掌にし、果は我が君をもおしこめ奉らん企とか、萬一治定ならば、ゆ／＼しき御大事に候へども、伊豆いまだ半信半疑、此の儀について御老體は、道「されば／＼、その市ノ正の一條、何分まこと知らぬこと、愚妻大藏が立歸り、直々の知らせをも信けかね、必定向者かの讒構と存じ、石「げに／＼、道「七たび索めて人を疑への世話もあれば、今朝愚妻が同行せ

し正榮尼に對面なし、根ほり葉ほり尋ねしところ、ア人心は盛衰によつて掌握す間に變はるの、利慾の下、人肉糞に集る蠅と、性根だこの出来るほど心得をりしが、ナニガ助作の昔より、故太閤の鴻恩を蒙り、加賀侯逝去の後は、執權職をも承はり、我が君を輔佐し奉る市ノ正、さやうのさもしき心底、毛頭もあらう筈なし、察する所、これ全く關東方の、或は反間の計略かと、石「げに／＼、さもあらん、さもあらうと存じ申した、道「サ初手ほどは存じたれど、はかりがたきは老後の慾念、我れ人共に血氣ざかりは、只管名を惜しみ、一命を卵の毛と輕んじ、忠義を磐石と存ずれど、功成り名遂げ、目に見えぬもの足れば、目に見ゆる不足に目が着き、先がつまるにつれ、死慾といふ執着萌す、ガこれとても凡夫の根性、彼の市ノ正などは、恥を知り、忠を存ずる男、よもかゝることはあるまじくト申すと、愚妻も正榮尼も口を揃へ、聲をひそめての極密ばなし、げに顔に似ぬは心、あまりのこと此の入道、驚き入つてござるや、石「とはまたどのやうな、いかなる儀でござりまするな

せきこむ石川、おちつく道軒、あたりとつくり耳に口

石「フム、スリヤ大御所が媒介にて、道「ひそかにひそかに、驚くはそののみならず、さすがに正榮尼分別細かく、駿府に滞在中、阿茶の局といふに、入魂となりしを幸ひ、よもやまの話の序、問ふにおちず語るにおちし、彼れが陰謀

の一部始終

又石川が耳に口

石「フム、スリヤはじめよりその心にて、道「日ごろ御城内の内證、善惡とも筒ぬけを、合點ゆかずと存じをりしが、彼此の犬が遠吠えと、遅蒔きにさとりし後悔、さればこそ先年も、加藤肥州をあざむき、お氣に召さぬ千姫どのを呼び迎へ、奥御殿に浪風起し、まづ太御母公の御意に逆ひ、強ひて我が君をば、二條城へ誘ひまゐらせ、あはやおん大事に及ばんとせしを、假令正直の加藤肥州が、同腹でなかつたりやこそ、思ひいだすも肌えに粟、近くは大佛殿の供養、停止沙汰も鐘の銘も、かね／＼打合はせし機關ならん、尤も、かく心づく上からは、元巢の知れし土蜘蛛、いかほどに綱張らうと、かつふつ恐るゝには足らざれども、目前に一つの難儀は、おん人質の一條なり、これはた關東の古狸と、彼の古狐がなれあひの奸策、御母公はじめお附き人がげぶたく、體よくおひはらはん算段とは、目の子勘定ついたられども、着かぬは關東へ返答の落着、彼の者當城に在る間は、何事も皆筒ぬけ、こゝが思案の關でござるテ

苦心の顔色、呆るゝ伊豆

石「驚き入つたる彼れが奸策、にツくきは徳川の古狸、此の上は何延引、速かに逆賊市ノ正が素ツ首刎ぬ、御親文を以て諸大名を招き、關東征伐仰せいださるゝの外はござらぬ、道「サ、戦ひは第二の手配り、邪は正に克たずの本文は、取分け當城は無雙の要害、いざとならば勝利は

治定、さすれば必勝は急ぐに及ばず、只心懸りは獅子身中の蟲 石「仰せではござれども、たかゝ老いぼれの市ノ正、歸城次第ひとつらへ、罪狀逐一いわたし、誅戮あらんに何の手問ひま 道「イヤ、理不盡にひとつらへ、首はねたらば知らず、一たび口を開かすれば、鷲を鳥は彼れが得手もの、助作といつしころより、故大闇に隨ひ、戰場の手柄こそ多からざれ、敵國へ使者となつては、中々の曲者、當今關東の本多佐渡と、鳥居數爭ふ古狐、疑ひ深き御母公の弱味へ魅入り、まつた我が君を御幼少よりまろめつけし舌さき、理を非にまげても實らしく、上の御心を迷はす時は、毛を吹いて疵のしつべし返し、我々疑ひを蒙るは勿論、關東へ機密一切洩れ、軍の手配り成らぬうちに、逆寄せゝられなば、身方の大不利 石「しからば入道の御所存はナ 道「されば、明日にも歸附いたさば、まづさりげなく出仕いたさせ、君、御母公、御出座にて、此のたびの件につき、きつと御礼明は無論の手筈、さていひくろめ退席するか、或ひは御不興蒙るか、いづれにもせよ、そのまゝ放ち歸さんは、手負ひ虎を放つも同然、ぢやによつて愚老が憂慮、殆ど思案に暮れ申すぢや 石「いかさま○此の上は只一策、下城をまぢうけ只一刀 道「イヤそれもまだ萬全ならず 石「スリヤいかせん御所存 道「イカニ豆州、御分君の爲に一命抛ち、奉公仕らん所存なるか 石「異なお尋ね、いふにや及ぶ 道「ホ、あつぱれ、その心底見る上は○コリヤ、ナ、ナ、

石「フム、すりや殿中にて彼奴を怒らせ 道「シイ、コレ、隠密々々

第二段

(其一) 吉野山櫻がり

かりの世を、夢まぼろしとみよしのや、盛り春に春添ふの御遊の場に花そろひ、五人の御臺所、假屋々々の風流陣に、格氣まじりの魂膽を、引きわたしたる幔幕は、目もあやにしまんだら染、わけて色濃き淀君御前、けふの御遊をかねてより、まつ丸どの諸共に、工夫とりく智略の方針、さしあたり北の政所に鼻あかせ、そのかた組の三條どの、同じ匂ひかゞのお局、しよげさせて興せんと、其の日まではひしがくし、けふ御前假屋の東西南北、花爛漫たる枝々に、吊す黄金の鈴千萬、春風わたつてから紅の、組み糸なびく有様は、いかなる蜘蛛の戯れぞ、遠山がすみ引きわたす、さほ姫神も鼻じろみ、月もおぼろの夜げしきや、現には見ぬ詠めなり 幔幕の、うちぞゆかしき花の花、淀の君にこやかに

淀「松の丸どのを初め正榮尼、大藏卿、皆のし

ゆの骨折にて、思ひしにます萬づの手筈、今にもあれ、我が君こへおこしあらば、御褒美のお詞は治定ぞや、これといふも畢竟は、みづからを思つてたもる人々のまごころ、忘れはおかぬ、嬉しいぞや

あふるゝばかりの御愛嬌、松の丸どの鼻たかだか

松「こがねの鈴にからくれなるの、いと目ざましいと申さうか、うつくしいと言はうか、ほんに又と天が下に、類ひない密のお思ひ付、けふ知つて皆鼻あこ、なんぼ政所さま最良の三條どの、此の御趣向には我が折れう、早う我が君に見せまじたい、常から豪奢をお好みゆゑ、無お悦びでござりませうわいな

いふ尾につき人、正榮尼が分別貌 正「今日は朝鮮征伐御勝利のお祝ひとて、例ない無禮講の御催し、御寛闊の上さま、定めし何ぞあなたにも、御趣向はしござりましよ、こゝにチンとしてお成り待つ間、かうばかりも智慧が無い、ナウ大藏卿、なんぞ才覚がありそなもの、大「さればいな、夫美濃守が口癖の話、孔明とやら張良とやら、敵大ぜい寄せしとき、櫓に上つて琴を弾き、門を開いておいたゆゑ、敵兵は呆氣に取られ、計略でもあろかと、智慧まけして逃げたとやら、それとはかはれど、態と幕の中を空洞にして、一同はあの櫻の蔭正「ホ、ホ、かくれてゐて、バアとばし言はうでの、大「ヤア何と正榮どの、半分いとはさず無禮すぎたその差出口、たが其のやうな小兒だ

まし、なんぼお前さまが御發明ぢやて、コレあんまり他を見くびるまい。正「ホイこれはしたり、マ興がる、いつわたくしが發明顔。大「ソレソレ、その顔が發明顔。

角だつ角もじ女もじ、右と左、奴の、如左、なかとる淀のかた

淀「アコレ、二人とも何ぞいの、大藏が趣向の底、どうやら面白さうなれど、若し間違つて我が君が、仲達とやらのやうに、お逃げ遊ばし、たらひよんなもの、シタガ暮のうちを空にして、不意撃とはよう出来た、孔明が琴に做ひ、腰元共はあの櫻蔭で、琴蛇皮線、笛胡弓、松の丸殿はそのお指圖、又大藏と正榮尼は、みづからが、偶と思ひ付の相談がたき、智慧貸してたもの、さりながら、總じて計略は密なるをよしの山、身方にもいはぬが花、はなしの仔細はあちへ往て

口合さへもふツくらと、雅やかなる御んものごし、死んだ趣向も聴き上手、活きたる花やにほの海、その底はいぎ、なごやかに、皆々うちつれ入りたまふ。後満山の花の色、とりのこされて時めくや、豊太閣殿下、武威國を震駭し、天が下し、る情け知る風流華奢の御んものずき、みく、にうどの目に珍らかなる、假鬘髻に唐冠、金色かやく繡綉の、緋縹子の袍や金櫛の、小袖大口大明の、輝きいでし御んいでち、御んつきくは、お氣に入りの増田右衛門尉長盛、小西攝津守行長、おもひの

伊達社下、錦の上に兒ぎくら、花折添へし、童小姓、錦繡の裳、羅綾の袂、きらびやかなり花の蔭、歩み留めしまばゆきは、金燦爛たる夕榮えに、彩る虹の弓なけば、ひきわたしたる如くなり。

大閣殿下、向うをきつと、ほゝゑみたまひ太「イカニ面々、隴月夜もわが威勢、日ツ本晴れの此の明月、アレ見よ、その明月の光を奪ふ、數千萬の金鈴、フウ風に鳴る音色のみかは、いづくともなく心憎き琴の音、ほのかなる笛、胡弓、なまめかしく蛇皮線は、ム、さては淀めがだし、ゆきをつたナ、何にもせよ、櫻が枝に黄金の鈴、月に照りはえ、さゝ鳴るは、ハテ面白き風情ぢやなア。

右衛門、御感の御ん詞、たゞ註脚をます田

増「げに朝鮮軍御勝利の、そのお祝ひに打つてつけ、テモサテモはでやかなる御ん趣向、山の名もさいさきのよしの山、はなの先きに星にます黄金の鈴、一步ごとに月影を、踏ませらる、御全盛、取りも直さず居ながらに、天上界の御遊のさま、小「まことに右衛門の申す如く、月の都の莊嚴も、此の景色にはいかで、及びもなき淀の御ん方の御工夫、恐れ入つたる御發明、外大明の御んあるごと、仰がれたまふ我が君は、文字のまゝに大日輪、内を照らしたまふ賢婦人の御ん方は、月の都の御んある、嬋娥にまさる御んよそほひ、まことに是れ萬歳の御祝儀。

さすが小西の小文才、耳學問は唐じたて、短長あはす行長が、詞の尻尾ひつとつて増「月の都の君さまが、嗚かしのお待ちかね、我が君にはいざまづあれへ、太「右衛門、攝津、皆の者、まあれく。

ト大やうに、折から奏る音楽の、音色に連れて練りゆくや。

大閣、席に着きたまふ、程もあらせず右手のかた

女「返りや〜

ト女中の聲々、てんでに押す櫻木の、杖をくゞつてはら〜、落花すつぱり繡緋、頭巾の下に能面、尻ひつからげ一本さし、腰に印籠伊達奴。

甲奴「イヤちくどんべい然う易うは退るまい、天下晴れた無禮講、推參はけふの祝儀、音にひびいた淀のかた、淀の川瀬の、かはせの、盃くれるさ、飲みますべい、淀の車は水ゆゑに、おれは酒ゆゑ目がまはる、酌を〜

ト傍若無人

女「テモ大それた慮外者、あんまり圖ない無禮講、御前問近が目に見えぬか

其の面剝がんと女共

太「コリヤ〜待て〜、苦しうない、身が面前をも憚らず、淀の酌所望とは不敵奴、その膽だま氣に入つた、誰れかある、盃與れい、「ハ、ア

ハツと仰せを奥のかた、正榮尼、大藏卿、かねて準備の銚子さかづき目八ぶん、腰元

桐 一 葉

共がとりんゝに
女「冥加にかなうた奴どの、有難いお盃、サア
いたゞきや

ト聲の下

乙奴「まつたく

トときよ聲

乙「奴冥加の報酬酒、正客はこゝに

正客こゝにトつんでるは、頭巾もおなじ緋
縮緬、對の衣裳、對の面

甲「ヤこりや、甲、乙「どうぢや

ト顔見あはせ

甲「おれが汝か、乙「汝がおれか、甲「頭巾
から衣服、乙「印籠から一腰、甲「汝が面

乙「うぬがつら、甲「よう似せたナ、乙「よう
眞似タナ、甲「こいつうさん、まがひものめ

乙「うぬ一詮義

ト腕まくり

かなたの幕のかけよりも

馬「嘯ましたしやんせ、その鑑定は、わたしに任
せて下んせいなア。

走りいづる女馬子、廣ふり袖や頬かぶり

増「ヤア御前近、尾籠奴、すさりをらう

トいきまく増田

太「イヤ叱るまい、賤には惜しき爪はづれ、
ヤイ女、見事その二疋、馬か鹿か、極め

馬「ハイ、殿さん御免なりませ、總別伯樂が
ならはし、鼻相る、目を相る、足を相る、それ

からソレふぐり、さりながらこれは人、殊には
目ない、鼻とてもかくれかんじやう、見やうに

も足ばかり、まだ、一つ残つたは、ナどうも、
ぢやによつて妾が工夫は、コレちの奴どのの

甲「ナイ、馬「そちの、乙「ナイ、馬「疑られ
た面晴れに、ナふらんせ、甲「ふれとは、乙「槍

か、馬「しれたこといナ、ふつたら出よう殺子
の目き、マアそんなものぢやないかいナア

ほてツばらりと鞭たづな、さばいてのけし

利發さや

太「ホ、面白く、ソレ誰れかある、囃子囃
子

ト鶴のこゑ、雀をどりや槍をどり、近侍が
心得もちいづる、いつの間にやら槍二筋

甲「ヤレしよとがな、ヤイ賢いもの、うぬ
がごたい持出せろ、乙「オ、サ僞奴、汝も出を

ろさ、甲「でをろさ、乙「でをろさ、甲「まつ
かせ、乙「どツこい、淨「ふりだすや、とツか

けべい、先のけろ、おなべが買ひ餅ねれたらも
てこい、淨「がツてんだ、淨「夕べも三百はり

こんだ、裸でどうちゆがなるのか、淨「こ
れも誰れゆゑ、淨「お敵が、甲「おてきの

乙「コ、コ、コ、コ、コ、コ、コ、コ、コ、コ、コ、コ
な、どツこい、ふれ、ふりこめさ

ふりこむ槍さき御座さきへ

馬「アあぶな

シヤマツ械になりふりも、女だてらや色ざ
かり

馬「馬やろ、戻り馬やろ、またしやんせ
甲「のけろさ、馬「のらんせ、甲「のけろさ

馬「イヤ、淨「とかく浮世は色酒の、飲み

やれ歌やれさきの世は闇よ、今は半ばの花ざか
り、淨「かげになりたやおまへのかけに

甲「コリヤどツこい

トふりだす槍、さてこそ胡亂と小西が眼方

小「ヤア心得ぬ奴がふるまひ、御油断あるな、
方々

いふやいなづま槍の鞘、ぬくよりはツし殿
下の胸板、あつと玉ぎる御んなきがら、ス

ハ狼藉とみぎ左、にげちる男女、以前の奴

甲「ウハ、ハ、ハ、ハ、日ごろの遺恨今本望、猿く
わじや思ひ知つたるか、増、小「逆賊やらぬ

ト増田、小西

甲「シヤこざかしき網裡の魚、これを見よ
ト腰の印籠、大地へ轟然あひづの狼煙、俄

かに陣がね攻め太鼓

甲「ア、ラ怪しや貝がねの、音色がちがつた、
ヤ、ハ、ハ、コリヤどうぢや

ト呆る、奴、なきがらムツクと豊太閣

太「ヤアおろか、佐々成政、かくあらんと存
ぜしゆゑ、御身代りの石田三成、大明王の倒

れしは、朝鮮軍のさいさきよし、コレ此の通り
ト假鬘、袍も冠もかなぐり

石「刃びきの槍尖うけて見よ

突きだす鹽首ムンツと取り

甲「圖るゝと思ひしに、かへつて汝らに、チ
エ、無念な、此の上は死物ぐるひ

猿くわじやいづこと忿怒の形相、頭巾も面

ぬぎすて、以前にかはる威儀堂々、めて

には頭巾、うしろには勇士ひきつれ豊太閤太「めづらしや佐々成政、淀が智略をちこち汝を取り巻く廿重十重

十二ひとへや濃いくれなるの淀「もはや叶はぬ、観念々々

廣ふり袖にあらなきなた、小脇にかいこみ淀のかた

太「われはこれにて見物なさん 淀「みづからはおんかいぞへ

かなたをきつと凜しきや、げにこそ淀のみだいでころ、氣高うもまた勇まし

無念々々と佐々成政、白刃を肚にひきまはす、だんだん幕はなきがらを、かくすみやかに收りし

太「皆これ淀が才智のいさほし、ホ、出来しなり、あつばれ

石田三成両手をつき

石「げに我が君の御説の如く、申すも恐れ多けれど、今いにしへに例なき、賢婦人の御方さま、かゝる御内助まします上は、大明は申すもおろしや、シヤム、ルスン、オランダもイギリスも、遠からず御手のうち 皆「臣等一同女皆「かすなりませぬ妾共も 皆「おいはひ申し上げまする

萬歳祝ふ聲々に、三吉野ゆする許りなりそのなかに、ひとりしよんぼり淀のかた、力なみだにくれの秋、雨にやつるゝ柳葉の、しほれはてたる御ん風情、殿下ふしんのみけしきにて

太「これはいかに、何わびたまふ、此のめでたさも樂しきも、皆そもじがいさをしと、一同がいひ、大明國取りしより、嬉しいと思ふ此の秀吉に、何遠慮、ナウ淀、心地でもわるいか、氣にそまぬことでもあるか、何事をむづかりたまふ、コレどうぞいの、續か、腰か

背さすらんと御ん大將、やうゝにおしへだて、只さめゝと聲くもり

淀「物體なや、ごしんものじの御不足、うけまらざる我が身、此の上の御不足、あつばれたくひなき豊臣の、榮華につるゝかたじけなき、嬉しいと思ふにつけ、杞憂は女心の淺ましや、千丈の堤もありゝと、行末の崩れ案じられ、接ぎ木の枯れて幹も根も、朽ちや果てなんざりながら、むづかしいは世の口の端、生中此の和子のあるゆゑに、お家を思ふまごころも、ねたみそねみの讒言と、さぞ方々の御んまはり氣、とはいふもの、此のまゝに、打棄て、は置かれぬ大事、此の上は心の潔白、いつそのことに此の和子をば、たゞ一思ひになきものとし、それから後に御訴訟と幾たび思ひ定めても、つらや絶たれぬ恩愛の、絆は金か、黒金かいなう

かツぱと臥して泣いたまふ、其の懐るにも嬰兒の、ワツとなく聲

淀「たがよゝ、いとほしや、さりながらいつまで未練、執着も今限り、お家の大事に何かへうぞ、南無阿彌陀佛

トふところ刀

太「ヤレ早まるな、亂心か、アレ止めよ治部少輔、秀頼のけい攝津守 淀「その仰せこそは情けが仇、生中此の兒がひかへづな、さる御ん方の御放埒、聞えまつらん由もなく、國民擧りて怨訴の聲、野にみち途に横はる、孕女のあへなきがら、齒をくひしばり睨みつめし、怨みの末や天罰の、果はいづこにかゝるらん 石「かゝる暴虐おはする由、今滿天下の普き取沙汰、夏の社禊も架に亡び、股の礎も、紂が不道に崩れし例、小「まことに治部少輔が申す如く、恐れながら彼の方さまの御んふるまひ、隨の煬帝が壯時にまさる御亂行、親子の女を右左に、おしならべて寵したまひ、肺腸酒池の御ん遊び、あまつさへ故なくして、専ら殺生を嗜ませたまふ増「これ京童が口々に、殺生鬪白とそしりの權輿 正「今は怖れて人皆が、聚樂の御所には鬼棲むと、夕日斜のころよりは、往來稀なる御ん悪行、

小西、増田、正榮尼、大藏はじめ一同が、かはるゝの御ん訴訟、秀吉公は默然と、御思案深き夜半の月、おぼろゝとなる鐘は、峯か麓か物すごく、こうゝとこそ聞こえけれ

淀「さては尙ほしも御んうたがひ、此の上は何ちうちよ、秀頼こちへ

ト御ん母公、いだき寄せんとしたまへば、アラ不思議やおどろゝ、月はいつしか雲隠れて、幾百千株の櫻が梢、見るゝ、黒む夜あらしや、どうゝどつとをちこちの、山彦ゆるするしわがれ聲

太「ヤレ早まるな、亂心か、アレ止めよ治部少